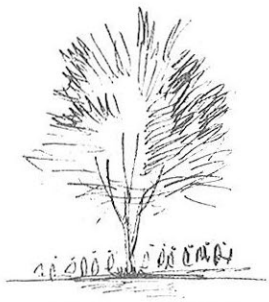
ひかりのこ

光の子



No.99　2002. 7. 1

● わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、
わたしにしたことなのである。（マタイによる福音書）

「雨が降っても」　　え・中島英子

「畦十字」

つかまへて引き抜いて草取りにけり
根ごと取る一つ一つの草を取る
目立ちたる草より抜いて取り余す
矢のごとき涼気を天の光とす
ひらけしは四方の青田畦十字
青空の行方へ行きぬ日焼けの子
ほどもなく鯰の子より釣れにけり

落合　水尾　（『浮野』主宰）

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　TEL／0480-72-3883　FAX／72-6649　振替／00130－1－128022
編集／光の子 編集委員会　e-mail:khikari@ceres.ocn.ne.jp　〒349－1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／社会福祉法人 共愛会

伝え続けるメッセージ

竹花信恵

それぞれの季節が足早に訪れては過ぎ去っていき、いつの間にか新緑の隙間から初夏の日差しが差し込む今日この頃となりました。

早くも子どもたちの顔はうっすら日に焼け、長くなった日照時間は更に遊びに熱中させています。

新学期の開始から今に至る三ヶ月、エピソードには事欠かない私たちの暮らしは、大きく揺れ動きました。送別と歓迎の入れ替わりの上に、「もう、満員です」とは言えない、ここを必要としている子どもたちがいる中で、大きくなってから、この家に辿り着いた子どもたちを新たに迎えました。

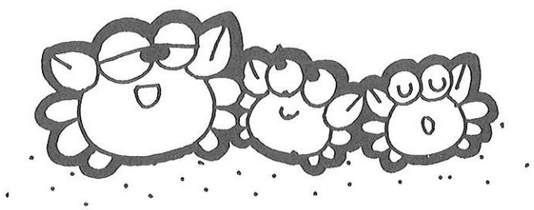
普通に暮らしていく、ということが決して当たり前でないことを私たちは教えられます。何より普通に暮らしていくことから始まります。互いを知りあい、仲間として認めあっていく上での葛藤は数知れず、くっついたり離れたりの何とも不思議な子ども同士の関係は、共にいることが自然になっていくにつれて落ち着いていくことでしょう。

きっと近い将来に、出会えて良かった、かけがえのない人間関係を、それぞれが実感していくに違いありません。

家の生活だけではありません。実年齢に合わせた教育の場に送り出される子どもたちは乗り越えるのが大変なハードルに日々立ち向かっています。背伸びしても追いつかないのは身長だけではありません。それぞれの年齢に相応しい体験、経験がスッポリ抜け、あるいは、するはずのないような体験、経験を重ねている子どもたちの負わなければならない内容の重さを、私たちはどれだけ引き受け、成長の日々につなげていくことができるでしょうか。

戻れる所まで戻ってやり直さなければ前へ進めない中で、小学生は小学生として、中学生は中学生として、高校生は高校生として、また社会人は社会人として「できるはず」であることを求められ、訓練され時には激しくぶつかりあい、また静かに涙を流します。目に見える学力、その他の様々な能力の問題を越えて、基本的な信頼、安心、自信…をあらゆる手だてを講じてじっくりと得られることが普通の暮らしを通して一人一人の未来に向かってつながっていけますように。

「どうせ、僕なんて」とうつむく小学生、「私の心なんて真っ黒なんだからしょうがないじゃない」と訴えた中学生、「もう、ダメ」と涙ぐむ社会人一年生。ひとつひとつの心と向き合う時、立ちすくむ思いがします。たくさんの言葉を用いることはできませんが、ただ一つ、「大丈夫だよ」ということを全力で伝えていきます。　何があっても可愛く、ステキな子どもたちに、「君は愛されていること」「安心して生きて大丈夫なこと」をメッセージとして伝え続けられる私たちの家であることを心から願い、暑い夏に備えていきたいと思います。



2つの文化に生きる

33

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

昨夏、いつものようにアメリカのテネシー州の夫の実家を訪れた時、とてもいいことを教わった。いつもなら時差ぼけで早朝には絶対目がさめないのだが、ある朝、ふと目が覚めて窓の外を見た。寝室からの眺めは目の前は裏庭の赤いカンナの花と緑の芝生、少し離れた所に白いバゴダがあり、何種類かの小さな花が咲くハンギングプラントが朝日に輝いていた。その後ろは野菜畑でとうもろこしやオクラ、トマトが実っていた。そして、その又、向こうは牧場である。テネシーグランパの趣味でいつも牛が数頭放し飼いにされている。ラッキーな時は馬が優雅に走っているのが見られる。

いつもながらなんとのどかだろうと思い、その絵に書いたような景色をのんびりと眺めていた。すると牧場の一番端で二つの小さな点が動いていた。よーく見ると、テネシーグランパとグランマがかなりのスピードで朝のウォーキングをしているのだ。散歩というよりも競歩に近い感じで歩いていた。何と二人は毎朝、三十分、ウォーキングをしていたのだ。何年続いているのかを聞かなかったが、これで二人の元気の素が分かった。早速、翌朝から私と夫もそのウォーキングに加わった。ベッドから起きて着替えて外に出るまではかなりおっくうだが一度外に出てしまうとその気持ちのいいこと。朝の空気を吸いながら黙々とただひたすら歩いた後は体中の血液がフル回転で循環しているのが感じられる。清々しい一日の始まりである。

帰国して早速、夫と二人の早朝ウォーキングを始めた。朝、いつもより三十分早く起きて、家の近くを歩く。週末はちょっと車で遠出して見沼用水路の桜並木を歩いたり、公園を歩いたりする。あれから一年近く経つが真冬に夫がインフルエンザで寝込んだ時以外はずっと続いている。その間、季節は巡って、夏は汗だくになり、秋や春はまわりの草花を楽しみながら、真冬は手袋にマフラーをして吐く息も凍りながら歩いてきた。用水路沿いの桜も紅葉から花の満開、そして新緑と様々な姿を見せてきている。何しろ時速約六・五キロ位のスピードで歩くのでかなりの運動になる。夫の一歩が私の二歩位で私は時々小走りになりながらの運動だ。体も頭もまだ眠っているが、足だけはしっかり動き、朝の空気を吸いながら歩いている内に目が覚めることもある。

ある時は全くの沈黙で、又、ある時は三十分間ずっと喋りっぱなしで、歩き終わった時は心の中もすっきりしている時がある。思いもかけないテネシーからのお土産だった。これから先、いつまで続くかわからないが、体の動く限り続けたいと思っている。

元気の素といえば、数年前からテニスをしている。子育てが一段落した頃、友達から誘いがあってその時初めてラケットを持った。始めて二年目位の頃はかなり、のめり込み、スクールに通ったり、朝、目が覚めて一番にサービスの仕方のことを考えたり、練習でテニスエルボーや肉離れになりかけたり、寝ても覚めてもテニスのことを考えていた時期があったが、今はすっかり落ち着いて週一回、二時間のテニスを青空の下で数人の友達と楽しんでいる。サービスも、とにかく入ればオッケー。ひたすら「楽しくなければテニスじゃない。」をモットーにしている。月二回お願いしている大学テニス部員のコーチも三月の卒業を区切りに社会に送りだし、この四月で三人目となった。「ちょっと耳が悪いので」と紹介されたので電話で大声で話せばよいかと思っていたら、そうではなかった。連絡はすべてEメールでなければならない。私達の話している事は口の動きで読み取る。この新コーチの話し方も始めは違和感があったが、少しすると慣れてきた。テキパキと的を得た指導をする、とても元気なコーチだ。おかげで今年一年も良いコーチのもとにテニスの腕も上がる（？）と同時に親指Eメールもかなり上達するのではないかと内心わくわくしている。

■エッセイ■

昔は良かった？

彫刻家　中島　睦雄

先日私は、夜少し遅く電車で帰ってきた。例年の展覧会が終わって、友達と三人でささやかな祝杯をあげた後だったので、私達の会話もつい声が大きくなっていたのかも知れなかった。近くに乗り合わせていた中年の男性二人、私達の会話に対抗する訳でもないのだろうが、少し声が大きくなってきた。

「我々の業界もきびしくなったもんだね。もう少し自由に、のびのびと仕事をしたいね。」

こんな会話が耳に入ってきた。

〝昔は良かった〟どんな社会に住む人でも、或る年齢に達すると　昔は良かった〟と思うものなのかも知れない。

「この問ね、五時過ぎまで生徒を残して、お説教をしたんだよ。そしたら早速お母さんから苦情が来ちゃったんだ。そんなに悪いことをした訳でもないのに、遅くまで残されては困る、というんだよ。こっちとしては、勿論、犯人の取り調べのようなもんじゃないんだよ。指導のつもりなんだけどなあ。」

どうやらこの二人は、学校の先生らしかった。誰か学校とそれを取り巻く色々な問題に及んでいった事でわかったのだが。「子どもが塾へ行く時間だったんだろう。お母さんが外でイライラしながら待っていたんじゃないか？」「そんなら一言いってくれれば良かったのに。それに、お母さんが〝学校で…〟と言っていたけど、○○側という言葉はどうも良い感じじゃないね。○○側というと何となく一体感がなくて対立的に感じるしね。」

こういう会話を耳にすると、なる程この業界も大変だなあと思った。そういう私自身、数年前までは同じ業界に身を置いていたのだが、今になってみると、やはり〝昔は良かった〟と思わざるを得ない。

私は、二十二、三の頃、中学校に勤めた。出席簿のつけかたもろくにわからない程度の若僧であった。二年生の担任を命ぜられ、無我夢中で毎日を過ごした。その頃の日本は、まだ社会全体が貧しい時代であった。

夢中で過ごしたそんな私の生活の中で、忘れられない人が何人かいる。生徒の保護者だったAさん、Bさん、Cさんと何人かの人が心に残っている。

例えばTさんというお母さん。保護者会や公開授業、PTAの集まりなどには必ずおいでになった。そして必ず担任の若僧に声をかけてくれるのである。「今日の授業は解りやすかったですね。黒板の文字も大きくて、多少目の悪いお子さんにも良く見えるでしょうね。」などと言ってくれるのである。そして、その言葉は暖かく、私を激励してくれているのが良くわかった。私はTさんに励まされ、反省もし、元気に伸び伸びと学校生活を送ることができた。このようなお母さんやお父さん達にとっては、この若僧は何とも頼りない担任だったに違いない。しかし、私の失敗や足りない部分を、徹底的に追及し、ペチャンコにやっつけるのではなく、逆に励ましてやる気を起こさせて後押しをしてくれていたのである。私はTさんに、Tさんと同じような人達に育てられていたのである。そんなわけで、長い時間が過ぎた今になってみると、一層Tさんへの感謝の念が深まってくる。このTさんは、二年程前に亡くなられた。私には何の恩返しもできなかったが、あのような心の方だったから、きっと幸せな人生を送られたものと思っている。

十年間中学校に勤めて後、高等学校へ転勤になった。新しい学校でも又、無我夢中。そこで又一人の素晴らしい人に出会った。生徒の保護者であるSさんという男性であった。この方も学校に対して極めて協力的で熱心であった。私はSさんのお子さんを担任した訳でもないし授業を受け持った訳でもない。しかし、「こういう人の本にこういう事が書いてあったから…。」と、コピーを送ってくれたり、「国際的な視野に立ってみると、美術教育がいかに大切か…。」などと実に参考になる良い資料を送ってくれた。私は、先輩のSさんからいただいた資料である事を説明して、授業の中で使わせていただいたりした。Sさんは、お会いすれば必ず笑顔で話しかけてくれる。かつてのTさんと同じである。

このように私は、実に平凡な教師として出発したのだったが、TさんやSさんとの出会いによって励まされ育てられて、いくらかマシな人間に成長したのではないかと思っている。そんな私が〝昔は良かった〟と、自分の過去を振り返ってみたのであるが、これが極めて稀な特殊な事例であったという事でなければ良いと思う。現代社会の色々な分野に於いて、人を励まし育てるTさんSさんの存在と、そのような社会風潮の実現を願っている。

学者もどきのつぶやき ⑭

柔道部とワイン

山形大学
学長　仙道　富士郎

二十五年間、医学部の柔道部の顧問をしてきた。まえにも書いたが、コンパともなると、三十名以上の学生とOB・OG（おもに元マネージャー）が、狭い我が家に押し掛けてきて（否、小生が招き入れた？）、深夜まで騒ぎまくる。若いころは小生が最後まで起きて飲んでいたが、近頃は最初に小生が寝込んでしまい、それを潮時につぎなる飲み会の会場に移動するらしい。

昨年九月に学長に就任して、顧問を辞することにした。学長が一柔道部の顧問をするのは、筋が通らないと考えたことは事実であるが、六十才を過ぎて、彼らに付き合うのが少々疲れてきたことも理由の一つではある。

年に一回、OB会と銘打った飲み会があるが、小生も柔道部OBの一人になったわけで、それには参加することを約束した。最大のコンパである追いだしコンパ（追いコン）と新入生歓迎コンパ（新歓コンパ）は続けて欠席した。

小生の家で繰り広げられる二次会に出すカレーの準備のことを考えると、あの大変さが無くなった分、楽なのだが、なんとなく淋しい。

と、先日柔道部OB会長の齋藤君から家に電話がかかってきて、「OB五、六人でお宅にお邪魔しても良いか」とのこと、「困ったものだ。やっぱり柔道部からは逃げられないか」と愚妻に愚痴ったところ、「なにか嬉しそうですよ」と見破られてしまった。

じつは教授でなくなったわけで、教授室を明け渡さなければならなくなってしまった。

四十年近い研究生活の間に蓄積した書籍と書類は、やはり相当なもので、全部家に持ち帰ると、寝る場所くらいしか残らない。

学長官舎が広いことが分かったので、そこに移ることにした。齋藤君は、官舎に移ったことも知っていて、どうも官舎での飲み会ということも目的の一つであるらしい。

当日は刺身、寿司の出前がまず届き、皆それぞれ自慢の酒持参で集まった。

こんなことははじめてである。さらなる驚きは、彼らの持参した酒の種類である。シャンパンも含めて多くのワインが集まった。彼らは無類の酒好きで、日本酒でなければ酒にあらずと考えている御仁達の筈である。

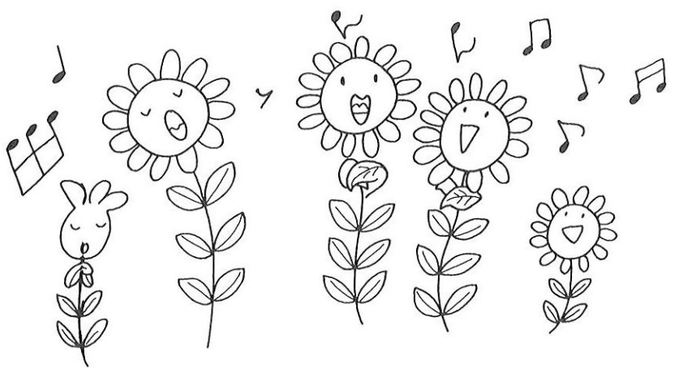
小生も、いただいたとっておきのカリフォルニアワインを出してご馳走すると、なんと一人の男がワインについてのご託を並べ始めたではないか。どうも変わらないのは小生だけで、彼らの生活はどんどん変化していっているらしいことに気づいた。

築五十年以上の学長官舎の客間は十二畳と広く、大満悦の彼らは、ここを基地にして小生を囲む会（要するに新飲み会）を作る相談を始めた。

小生にかわって整形外科の教授に顧問をお願いしてあるので、その先生に悪いのではないのか、とも言ったが、柔道部は関係なく、飯田四丁目二ー十五（小生の自宅）で、二十五年に渡りうだうだと酒を食らった連中の集まりと言うことで、小生も了解した。

手回しの良い一人がしっかりした厚手のノートにナンバリングしたものを持参して、参加者はその都度名前を書き込み、デジカメで写真を撮ってノートに張り付けるという。

年一回の集まりということで、ナンバリングが五十まであったので、愚妻が「何回まで参加出来るかしら」とひとりごちると、皆は一瞬ひるんだが、誰かが「もちろん最後までですよ」と言った。



新入職員紹介

プ・リ・ズ・ム

子どもの心に寄り添う

山口　麻衣子

県内の児童養護施設で非常勤として二年間子どもたちの養育にたずさわり、今年四月から光の子どもの家で働かせていただくことになりました。

いたらない私ですがご愛顧のほどよろしくお願いします。

前の施設を退職しても幸いなことに子どもたちとの関わりは続いています。これからも子どもたちの成長を、影になり日向になり見守っていきたいと思います。

子どもにとって一番辛いことは「関係を絶たれる」ことです。

これから先、ずっと子どもの心に寄り添っていきたいと思います。

どうか、すべての子どもたちに明るい希望にあふれた光が灯りますように。

相良　有美

みなさん、はじめまして。三月に聖学院大学を卒業して、四月より光の子どもの家で働かせていただいております、相良有美と申します。どうぞよろしくお願い致します。

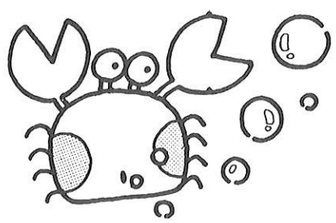
ここで暮らし始めて二ヶ月余が経つのですが、三月まで親元で生活していた私は料理は出来ない、掃除も手際が悪いと、出来ない、知らないことだらけで、親のありがたさを心から感じると同時に子どもたちや職員に迷惑を掛けてばかりで申し訳ない気持ちでいっぱいです。

そんな私を子どもたちはたくさん、たくさん助けてくれます。「(タンスを指差しながら)下着はここで、体育着ははここ」や「お風呂(浴槽)は、オレたちはこんな風に入るから。相良さんはここに入って。」と一つ一つ丁寧に教えてもらいました。

つい先日、布団に入って絵本を読み終えると「相良さん、そろそろ慣れてきたよね。」とふいに和希が言うと、啓や藤耶も一緒になって「慣れたよねー」と言ってきました。

関わり始めた頃は子どもたちの日から見てもよほど危っかしく緊張した顔をしていたのだと思います。子どもたちも慣れない私に気を遣い、遠慮していたところがたくさんあったのではないかと申し訳ない気持ちでいっぱいです。

まだ、子どもたちの歩みを後から追いかけ手を引いてもらっている状態ですが、少しずつ少しずつ子どもたちに近づき、一緒に一日一日を歩んでいきたいと思っております。



素晴らしい出会いを創るために

小西　剛史

はじめまして。この四月から働かせていただいている小西と申します。

子どもたちと暮らし初めてから二ヶ月余りになりますが、ご支援の皆様や先輩・仲間たちに支えられて楽しく充実した毎日を過ごしております。

僕は人との出会いというものを何よりも大切にして生きてきました。

これまでの多くの素晴らしい出会いによって、光の子どもの家に辿り着くことが出来、今この道を歩んでいるのだと思います。素晴らしい出会いは、更なる良い出会いを生むものと信じています。

僕は、光の子どもの家と出会えた事、そして皆様に出会えた事を心から嬉しく、そしてありがたく思っています。

元気な事くらいしか、これといって取り柄のない自分ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

笑顔の生まれる食生活を

富岡　真由美

『光の子』の一読者だった私、縁あって職員のお仲間に入れて頂く事となりました。どうぞよろしくお願いします。

みんなが元気になるご飯が作りたい、なんて大きな事を言って来てみたものの…「しょっぱい」「味がない」「玉ねぎが辛い」…実際はそんな失敗ばっかり。

前途は多難。それでも「今日のご飯なあに?」「これ美味しいね」そんな笑顔に励まされて、今日も元気にもっともっと笑顔の溢れるようなご飯を作りたいと思っています。

寂しく、悲しみのいっぱい詰まった子どもたちの食卓から笑顔が始まり増えて、心豊かに大きくなっていきます様にと願いを込めて…。

暮らしをつくる

相川　裕之

現在、臨時の形で光の子どもの家に御世話になっております。相川と申します。子どもたちと日々楽しく過ごせればと願っております。

日常を日常として感じ、捉え、日々過ごして行くのは簡単なようで、つまづきも伴うものだと思います。普通家庭では当たり前でも、施設においては職員の努力・取り組みは不可欠で、事象によっては完全とは行かない場合もあります。諦めるわけではなく、最初から取り組まないと割り切るわけでもなく、ひとつひとつミリ単位で進んで行くしかないのだ、と相当な覚悟が必要です。そんな、先輩職員の方々のお手本を参考にし、自らへのさらなる精進を進めてゆく所存です。どうぞ宜しく御願い申し上げます。

養護メモ 93

出発 その5

菅原 哲男

一昨年秋、そして去年と今年の児童福祉週間に、光の子どもの家の子どもたちの状況と暮らしの風景がTV朝日の報道番組で放映された。他にもTBSラジオなど、マスコミに取り上げられる機会が多かった。

一昨年秋の放映のための取材について、数回の職員会議などで議論をし、かなり徹底した規制を条件に承諾したものだった。そうして二〇〇〇年十一月に放映された映像は、光の子どもの家の名称も、子どもたちの顔はもちろん、建物や暮らしなど徹底して斜線を多用した画面で、特定されることを避けたのだった。

その後から、光の子どもの家だったことを確認した支援者や、その番組を見た人たちから、あの高校生や、光の子どもの家の子どもたちは酷い虐待を受けたので、相当無惨な容姿だろうから隠さなければならなかったのだろうか、といった問い合わせが相次いだ。TV局にも同様の電話やFAXが相当数寄せられたという。

そして、取材に訪れたクルーや番組制作者たちから是非、もう一度放映の機会を与えてくれないかという申し入れがあったのは二〇〇〇年も押し詰まった頃だった。

子どもたちや職員とこの件について話し合いを重ねた。

職員たちは一様に抵抗を示した。意外なことに、機関誌などに自分たちだけがいつも仮名で載せられてきていたが、自分たちが何か悪いことをしたのだろうか、とつぶやく子どもたちがいた。三回目の子どもたちとの話し合いで、光の子どもの家で暮らしていることが恥ずかしいことだと思ってきたが、変だと思う。あのTVに映った私たちは、犯罪か何か酷いことをした子どもたちのようだ。私は顔を映されるのは恥ずかしさは感じるけど映さなければならないのだったら、ぼかしたり斜線で隠されたくはない。殆どの中学・高校生はそういう意見になった。もちろん、年頃の子どもたちである、自分は映して欲しくないという者もいるにはいたが・・。

結局、萌季は自分が撮られるんだったら、その意味を教えて欲しいし、納得したら顔を隠しては放映されたくない、と言った。そうして取材の受け入れが決まったのだった。

取材の中心は、萌季と静一だったので、その他画面に顔がはっきり映る子どもたちの親権者・親たちに承諾を求めた。驚いたことに親たちの殆どが、どうして顔を隠すのですか、顔を隠さなければならないのは私の方です、と言うのだった。

萌季は、大学受験の追い込みの時期に重なったが、取材の人たちに勉強を教えて貰ったり、殆ど意に介さずつきあっていた。

こうした中で、確実に子どもたちの意識は変容していった。

光の子どもの家で生活していて何が悪い、どこが違う、といった感覚になっていったのである。

これは正当な感覚だと私たちも気づかされたのである。

プライバシーの保障の点については気を配ったが、顔を隠さなければならないのは決して子どもたちではなく、貧しい処遇の状況については為政者や法人及び職員の方であったことを確認させられたのである。

また、特にここでの生活の最終期を迎えていた萌季にとっては、自分がここで暮らしたことが何であり、どう考えなければならないのかという結論を迫られたことでもあった。

ここを出ていこうとしていた萌季は、「小学生や中学の初め頃までは何回も悔しい思いで泣いたことがあった。でも、何が悔しいのか考えたら、ここにいたことなんかではなく、家族と別れて生きていることだったんだと気がついた。」「ここに来て本当によかったし、家にいたら本当に幸せだったんだろうかって思うようになったんだ。」「ここを出て、どこかで暮らしていくんだけど、休みに帰ってくる、何か困って相談するのは、まり子さんや長くつきあったここの大人たちしか自分にはいないし、自分にとってここはそういう場所なんだ。」と明晰に話した。

お盆やお正月など日本国民の大移動で道路や交通機関は激しく混雑する。人々はそれぞれの故郷に帰り、エネルギーを蓄えてまた戻る。

萌季たちにとって、光の子どもの家はそういう場所であり、年を重ねた者たちが待っている場所になっていくのである。

留学の準備も終わる頃、萌季はしきりに「いつ戻ってきていいの？」と、言って回っていた。来年の三月には必ず帰る・・とも。今は、そんな気配もなくいそしんでいるようだ。

萌季と成田空港に着くと、TV朝日のスタッフがカンパのドルを携えて見送りに来てくれていた。

現場から

続・光の子らしく ⑪

岩崎 まり子

紫陽花の色が、鮮やかになってきたなあと思いながら眺めていると、すぐその横で小学生の佳美が向日葵の種を植えていました。子どもたちにとって向日葵の咲く季節は心待ちにする季節です。宿題はありますがギラギラと照りつける太陽の下、汗まみれになりながら遊びまくります。汚れだか日焼けだか見分けがつかないような真夏子どもの出来上がり。

「佐藤さんち、ご飯ですよー」の声に佐藤家の子どもたちはガヤガヤと帰宅。顔を洗ってもまだ熱のとれないような顔で、ぐだ～っと席に着き麦茶をがぶ飲み。「ふ～」と満足気な一声。その後、わしわしと夕食を摂り、シャワーをし、絵本を一緒に読む頃は、途中で寝息をたててしまいます。本当に、毎日が自分の力試しのように体力のぎりぎりまで遊んでいた子どもたち。そんな子どもたちを見ているのは、何だかとても幸せです。

あの夏がまたやってくるのだなと楽しみ半分、緊張半分な私です。

どの子どもにとっても、夏休みは特別です。その年の夏休みはその一回限りです。だから、出来る限りいい夏休みになるよう協力していきたいと思います。そのために個別の夏の計画を職員会議で検討します。もう一周り成長することを願っていろいろな計画が出ますが、ベースになるのは普段の生活です。

前年度から、法的手段に訴えて親子を分離してまで入所させなければならない虐待のケースが増えてきています。私たちの生活もかなりのハイペースでの展開を余儀なくされています。

貴もそんな中の一人です。彼がそうせずにはいられない理由は、彼の育ってきた過程を考えれば理解も納得もできるのですが、目の前でいろいろやってくれるとどうも…。先日貴は風邪で学校をお休みしていたのですが、その間各お部屋からいろいろな物が無くなりました。引き出しも開けっ放しだったと高校生たちはぷんぷんでした。そして貴が寝ている部屋の襖越しに「どうせ、あいつがやったんだ」「言ったって無駄だよ」などと言い、私たちの方でも彼女たちを訂正させる根拠を見つけることができず、家中を陰鬱な空気が覆いました。当の本人も、あんなことを言われてさぞや落ち込んでいるだろうと思いきや、すっかり規則正しい寝息をたてていたということでした。

誰の生活に対しても安定と安全を保障したいと願っています。物が無くなったりしないような生活、物を盗らなくてもいい生活を。入所前にしていた生活の中で彼らが学んだ世間的に受け入れがたい言動を、彼ら自身を否定することなく、表現しなくてもいいように、そういう生活を創っていかなければならないと思っています。一朝一夕には何ともならないようなことなのですが、今日を何とか乗り切っていくために今、何が出来るか、を話し合いながら積み重ねている段階です。何年やっても、少しも成長できず、経験年数と力量の差を痛感するばかりですが、それぞれの子どもたちにとっていい夏休みが実現するよう、そこに至るまでの生活を何とか少しでも上向きに出来るよう努力を続けていきます。

今年度は、6月8日に基準外職員確保のためのバザーを行いました。417,099円の売り上げでした。御協力ありがとうございました。

光の子どもの家 バザー実行委員会

日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2002年1月1日 ▶ 3月末日

1月

1日　元旦礼拝・食事会
5日　正月気分をぶっとばせ会
19日　藤耶母告別式出席
20日　檜山由岐母宅へ送る。措置停止
26日　東京家政大教授2名、学生6名来訪
28日　職員個人総括実施
○　川越児相、中央児相訪問調査

1月の物品寄贈者 比企敦子 若柳慶雅・慶久美 門井由紀子、加須荒井 加須福田不動産 奥田牧師 東埼玉ホーム 浜松市満丸 さいたま市 長谷川の各位様

2月

1日　浦和児相訪問調査
4日　高校推薦入試
○　個別自立支援計画総括開始
11日　菅野ドクター来訪
○　現任訓練実施・森田喜治先生来訪1泊
15日　水谷貴入所
16日　聖学院学生14名来訪。子どもと遊ぶ
27日　高校入試

2月の物品寄贈者

東大宮教会山根、立正佼正会、須藤保、加須福田、鈴木正一、旗井土屋、株式会社たかのの各位様

3月

1日　新年度体制について確認
○　自立支援計画（案）開始
7日　高校入試合否発表。全員合格 合格祝い会
8日　高校卒業式　3名卒業
○　舞鶴学園職員4名来訪して研修と交歓の一日
11日　出発の会　江森ヘヤーサロン散髪奉仕
12日　小学校との懇談会
16日　幼稚園卒園式3名卒園　中学校卒業式3名卒業
22日　小学校卒業式2名卒業
23日　第65回理事会　聖学院大学生来訪
26日　下町美也子入所　職員送別会
27日　読売正力会様より食堂椅子50脚いただく
28日　小山乃衣入所
31日　中村一男 神田幸枝 梶原完退職

年度末在籍者数　幼児9名小学生9名中学生5名高校生8名 計35名

3月の物品寄贈者

吉羽次保、斉藤賢治、加須畜産、田口孝幸、白尾美枝子、須藤保、西川清香、高原、山ノ下悦子、キッズ、鈴木重義、針谷利男の各位様

おかげさまで今年度もこのように終えることが出来ました。新しい年度も皆様共々祝福がありますよう祈ります（くら）

反射光

☆濡れた緑が風景を落ち着かせます☆四月に着任した職員五名をプリズム欄でご紹介しました☆志の高さや謙虚さが新鮮です☆加賀美尤祥氏の日本社会事業大学教授就任のお祝いに参加しました☆三月まで施設長だった氏の生家である甲府市の遠光寺という名刹に付設された山梨立正光正園をご案内していただきました☆山梨県建築芸術賞を受けた立派な施設群が、千年を超える長い歴史と広大な寺域にあり、そう言われないと気づかない、まさに付設された施設なのでした☆キリスト教の施設や私学の法人が教会を設立・運営してきた歴史は、子どもが親を産むような逆立ちした現象であったことを改めて考えさせられました☆歴史を超えて教会が語るコトバを証する施設として原点に立ち返らなければとも思いました☆子どもたちが最も美しくなる楽しい季節の夏休みがすぐです☆生まれてよかった、出会えてよかった、と心から喜ぶ関係の保障をこの家が確実にしていく働きを更に！乞う、ご支援　（哲）